〔特別展によせて〕

橋本コレクションと明末清初絵画

京都芸術大学助教授　曽布川　寛

橋本氏は、長年にわたり一貫して明清絵画を収集してこられたが、それは無計画にではなく、自身の研究の裏付けをもって明確な方針の下になされてきた。従って橋本コレクションには、確かに明清の全時代をカバーして満遍なく作品が揃っているけれども、その中にコレクションを構成する重要な柱が何本かあり、これが橋本氏のいわば重要項目をなしている。例えば明代中期の張路・鄭顕仙（ていてんせん）等の浙派、文徴明・謝時臣等の呉派絵画、また呉彬（ごひん）・丁雲鵬に代表される明末絵画、清初の石涌・石渓等の遺民絵画、龔賢（きょうけん）・藍瑛・袁江（えんこう）等の江南各都市スクール絵画、中期の金農・高鳳翰（こうほうかん）等の揚州八怪、阿片戦争以後、清末・民国を含む任伯年・呉昌硯・斉白石等の近百年絵画があげられる。この他にも沈南頻（しんなんぴん）・方済等のいわゆる来舶画人に対して徹底した調査を続け、最近では謝時中・王古山・金邠（きんひん）といった無名の画人を発掘している。この結果、橋本コレクションには好資料が随分集められ、研究者にとっては垂涎の的であるが、なかでも明末と清初絵画は、質の点でも量の点でも、個人としては世界でもトップクラスの充実した内容を誇っている。収集家にとって、もし専門の研究者がそのコレクションを見ないで研究はできないといえば、それは収集家冥利に尽きるものと思うが、まさにこの分野での橋本コレクションは、そういわしめるだけの内容があるといっても過言でない。そこで明末清初絵画について、今回展観を予定される作品を中心に若干触れてみよう。

ここに明末清初というのは、これまで三百年続いた明王朝が、満州の異民族のたてた清によって滅ぼされた1644年を境に前後の時代、即ち年号でいえば明の萬暦（1573～1627）以後、清の康熙（1662～1722）までをいう。この時代は、明王朝の失政、そして清への王朝交替、更に異民族支配と打続き、政治的には不安の時代であったが、文化的には意外と昂揚した時代であった。絵画の面でも、苦難な時代であるが故に却って造形的意欲が昂揚したという一面があり、明清においてこの時ほど、多数の画家が輩出し、多様な芸術が咲誇った時期はなかったといってよい。

まず明末絵画を一瞥すると、そこに非常に特異な一群が目につく。呉彬・丁雲鵬・李士達・米萬鐘・盛茂燁（せいもよう）といった画家であるが、彼等の絵は幻想的であったり高踏的であったり、或は極端にデフォルメを加えたり、或はある要素だけを異常に強調したり、およそ尋常ではない。文徴明や居節の穏やかなバランスのとれた呉派文人画と比べれば、違いは一目瞭然である。橋本氏の珍重する呉彬の渓山絶塵図（写真１）を例にとると、2メートル50センチにも及ぶ大幅に、いかに中国に奇勝が多いとはいえ、この世とも思えぬ奇怪な峰々を林立させ、奇岩怪石を縦横にめぐらして、規模宏大な非現実の世界を現出している。同じ世界は李士達の石湖図・米萬鐘の寒林訪客図にも窺え、幻想と怪奇と不安の交錯したようなこれらエキセントリックな絵画は、萬暦赤絵に代表される爛熟した文化の所産であり、外憂と内患の相継いだ社会不安の所産でもあろう。

変って清朝初期に入ると、まず目に止るのが遺民画家の個性的な絵画である。遺民とは、異民族の清朝の支配下に属することを潔（いさぎよ）しとせず、なお明朝を奉じた人々のことで、遺民画家には八大山人・石涌・石渓・傅山・徐枋等がいる。このうち八大山人と石涌は明の王族の家に生まれ、明朝滅亡後、各々数奇な運命をたどったが、前者の絵は、終生曲げなかった抗清の意志を表わしているかの如く、後者の絵は、廬山や黄山に遊び、その観照を独創的な超俗山水に表現している。いずれにしても清朝の異民族統治は、当時の人々の運命を大きく左右させ、王鐸（おうたく）や戴名説（たいめいせつ）のように、明清二朝に仕えたとして、後世貳臣伝に名を列ねられた画人もいた。

(1)渓山絶塵図　呉彬筆

(2)雲嶺残曛図　龔賢筆

しかし清初の絵画は、遺民絵画とは別の一面も持っている。明代以来、揚子江下流の江南地方は経済的に繁栄し、画壇の中心地域であった。明清交替の際、この地域も清軍の南下によって兵禍を被ったが、次第に平和をとりもどした。すると都市を中心に絵画活動が再が盛んになり、遂に各都市独自のスクールが形成されるようになった。南京の龔賢を始めとする金陵派、杭州の藍瑛をリーダーに孫枝（そんてい）・章谷等の一派、揚州の袁江・袁耀等の袁派、松江の顧大中・睦𤣥（りくい）等の華亭派、歙縣（きゅうけん）の弘仁を典型とする新安派がそれである。各派は画風を大幅に異にし、地縁を重んずる各都市新興階層によって支えられていた。龔賢の雲嶺残曛図（うんれいざんくんず・写真２）は、どちらかといえば南京の清涼山にこもった彼の遺民的性格を示すが、彼を首とする金陵派には、当時流入したばかりの両洋画の陰影法や遠近法を取入れる者もおり、一方古画伝統を墨守する王翬（おうき）等の正統派に比べ、随分革新的な気風があった。

曽布川寛先生は中国絵画史を研究されておられる方で、今回の『美のたより』に、橋本末吉氏の蒐集品の特色について、ご寄稿していただきました。（編集係）

季刊 美のたより No.50
昭和55年２月20日
発行　大和文華館

Copyright ©2007 The Museum Yamatobunkakan. All Rights Reserved.